

第2分科会（教育条件整備・事務改善）

現有備品の有効活用を通じた子どもの学びの支援

～ “すぐに探せて、即使える！”をめざした教育環境の整備～

石川支部担当

| | |
|-------|--|
| 研究責任者 | 石川町立石川小学校 主査 佐藤 春子 |
| 発表者 | 石川町立沢田中学校 副主査 秋山 美保 石川町立母畑小学校 主事 柳 沼 隆 |
| 司会者 | 石川町立中谷第二小学校 主査 白旗 優子 |
| 指導助言者 | 福島大学総合教育研究センター 教授 宮前 貢 様 |
| 記録者 | 石川町立中谷第一小学校 主査 猪狩 昌 恵 石川町立南山形小学校 主事 星 尚 美 |

現有備品の有効活用を通じた子どもの学びの支援

～ “すぐに探せて、即使える！”をめざした教育環境の整備～

石川地区小中学校事務研究会

1 はじめに

石川地区小中学校事務研究会は、石川郡5町村の小学校24校、中学校8校からなり未配置校2校を除く事務職員30名と校長2名で構成されている。年齢構成は大部分が中堅事務職員で占めており研究活動を進めている。

石川地区では平成12年度の県事務研研究大会二本松大会において、「学校経営への積極的参画」というテーマで発表を行った。その後、会員それぞれが引き続き同じメインテーマで個人研究に取り組み、その上で「企画委員会等」「会計全般」「実務関連」に班編成し研究してきた。

平成18年度から県事務研の大会テーマが「子どもの学びを支援する学校経営事務をめざして」に変わることもあり、全会員で話し合いを重ね、備品を通して子どもたちの学びを支援していきたいと考えた。

2 主題設定の理由

景気回復の兆しが見られてきている今日ではあるが、各自治体ともその影響が見られずまだまだ厳しい状況にあると思われる。

石川地区においても予算の財源が厳しく、毎年学校予算が減額されている状況で町村により差が見られる。中でも備品購入費に関しては3年連続で配当なしという町村もあり、教科用図書が新しくなってもその内容にあった備品を購入することができず、現有する備品を使用しながら指導していくしかないのが現状である。

また、備品購入費の配当されている町村においても新しく購入した備品を優先して使い、古い備品をほとんど使用しないという状況や、要望があったために予算計上し新年度に備品を購入しても担当者が替わると使用しないという状況も見受けられる。

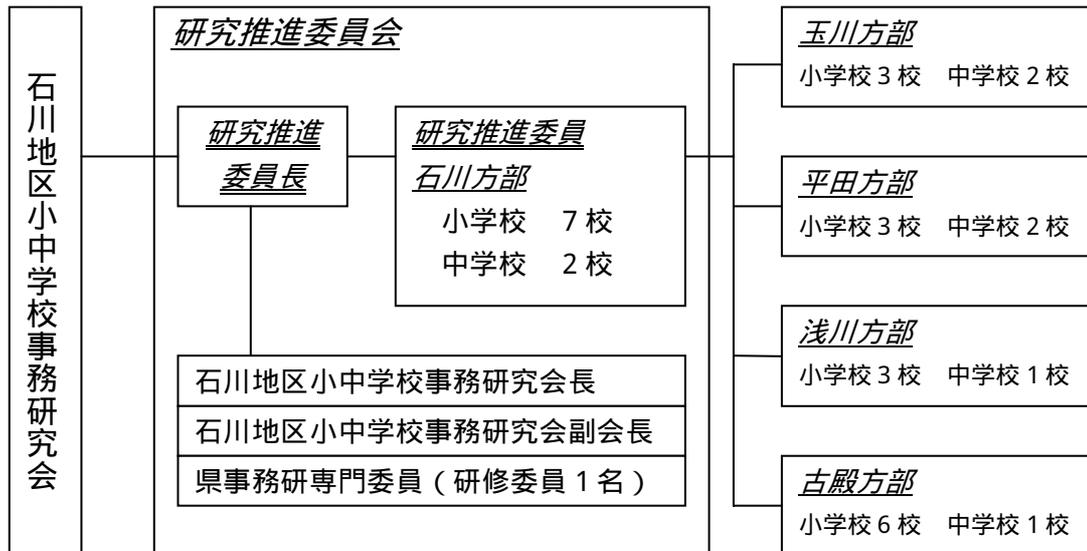
他にも、予算の有無にかかわらず各校とも授業での備品活用において何らかの問題を抱えているのではないかと考えられる。これらの問題を明確にし、改善するには、われわれ学校事務職員の立場からできることは何か、また、予算面だけではなく環境整備面から備品を有効に活用できる教育環境作りを教員と協力し取り組むことで、もっと子どもの学びを支援していけるのではないかと考え主題を設定した。

3 研究計画

研究体制

研究推進委員会を置き、石川方部で担当する。石川方部は2名ずつその他の方部に加わり、各方部と連携を取りながら研究を進めていくこととした。

研究組織



計画の内容

各校での教材備品に関する使用状況等の把握（教員、事務職員対象のアンケート実施）
 問題点の明確化及び手立ての検討
 手立ての実践とその効果について

4 研究の経過

各校での教材備品に関する使用状況等の把握（平成17年9月アンケートの実施）

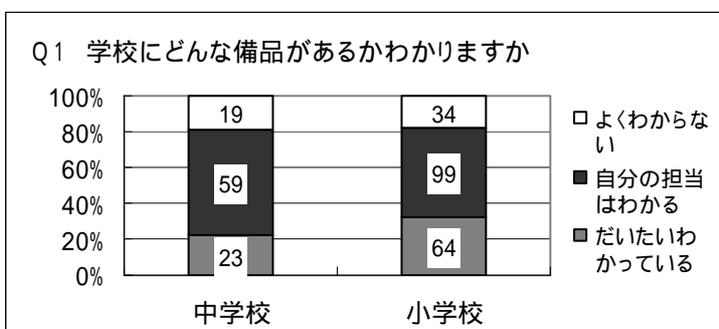
今後の研究の参考にするために実際授業で備品を使用する教員にアンケートを実施し意見を聞くことにした。

アンケートの内容は、「現有状況」「管理状況」「照合」「活用」の4点について意見を聞く。

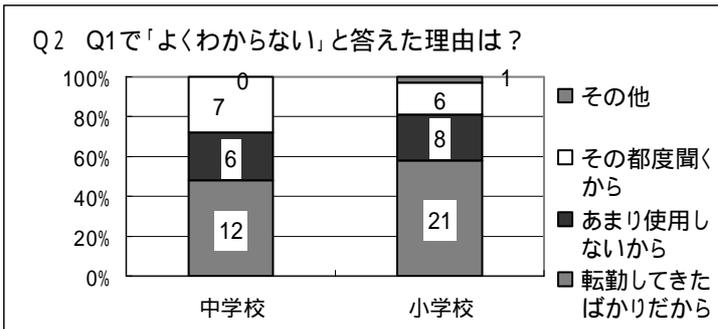
質問項目については、各校の問題点と考えられるものとそれを解消するために考えられる手立てを事前に話し合いその内容を利用し作成した。

教員対象アンケート結果 回収率 小学校91.0% 中学校85.1%

* グラフ中の数値は回答数

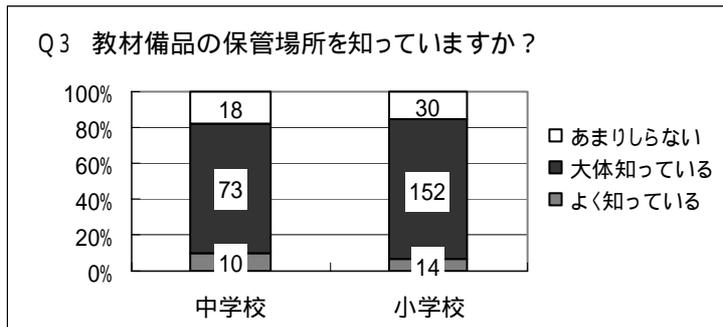


小中学校とも自分の担当教科については、多くの人が現有備品について分かっているようだ。

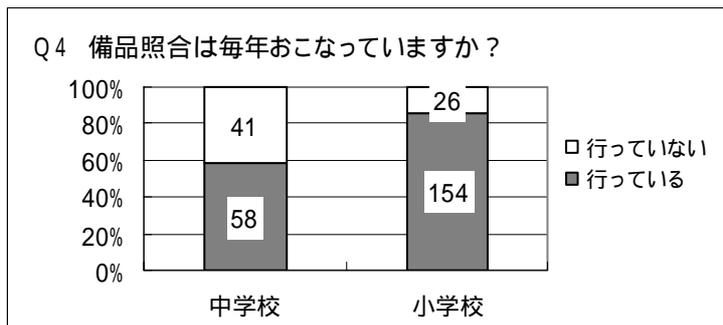


異動して間もないためまだ現任校の備品について把握していない人がほとんどだった。

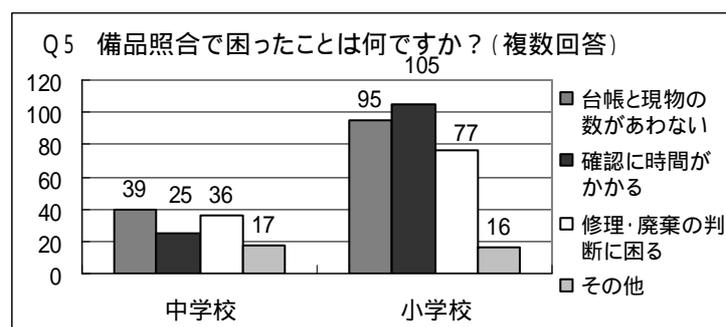
- ・ 教科ごとに保管場所が異なるため全部見たことはない。という意見もあった。



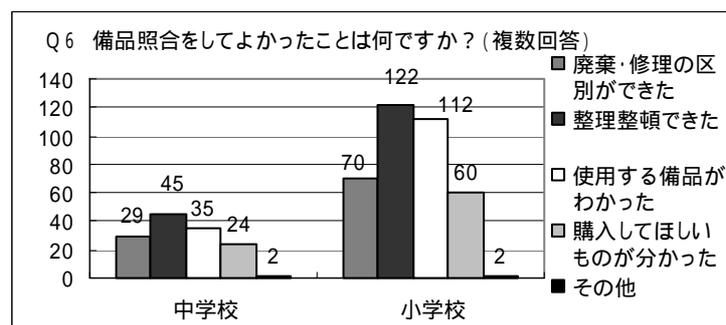
大部分の人が知っていた。授業での使用にかかわらず巡視などで見かけることもあるためと思われる。



小学校ではほとんど行われていた。中学校では教科準備室があり備品を探すのが容易なので、教科主任など一部の人が行っているのではないと思われる。

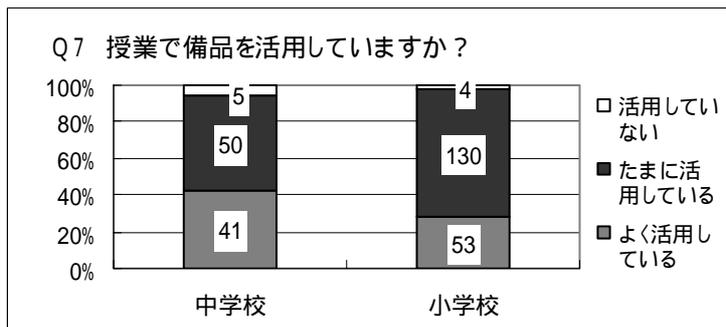


- ・ 備品台帳と違う所がある。
- ・ 年代物のため台帳とあわない。
- ・ 備品台帳に載っていないものが残っている。
- ・ 名前だけでは形を想像できない。などの意見もあった。

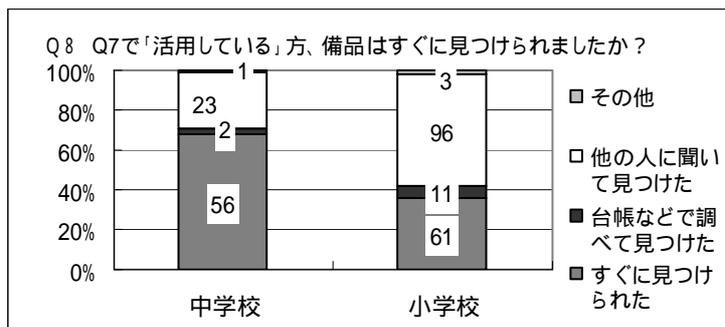


備品照合のときに整理をし、廃棄や修理の区別をしているようだ。

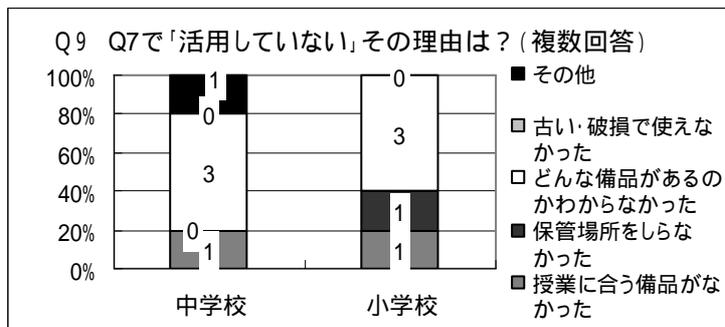
- ・ 照合時に授業で使用できるものを発見使用している。という意見もあった。



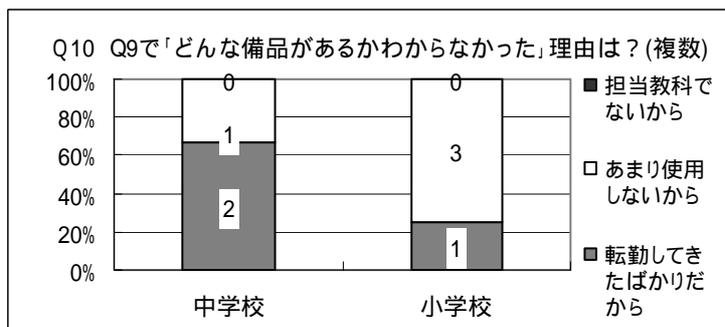
大部分の人が授業で活用しているという結果になった。
少数だが活用していない人もいることがわかった。



小学校では半分以上の人が他の人に聞いて見つけている。
中学校ではすぐに見つけることが出来ているようだ。ある程度教科ごとに分けられているので探しやすいのではないか。



回答者は転入してきた人が大半のため、コンパス、定規、グラフ黒板位しか使わなかったようである。



転入者であることや授業者の方針によるのではないかとと思われる。

Q11. 備品の使用頻度を上げるためにはどうしたらいいと思いますか？

(どうすればもっと使いやすくなりますか？ 教えてください)

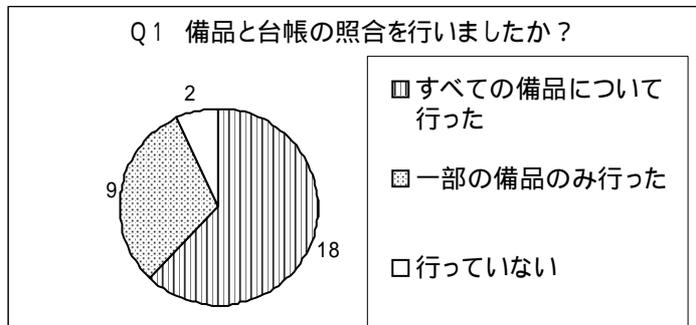
- ・ 整理整頓。見やすく、使用できる状態に。
- ・ 全職員が保管場所について共通理解。
- ・ 廃棄処分。本当に必要なものに絞りすっきりさせる。
- ・ 備品台帳に写真を貼り、担当が替わってもどんなものかわかるように。
- ・ 新規購入時に紹介や使用例、使用教科なども行えば。
- ・ 破損がすぐに修理されていて常に使えるようになっていれば。
- ・ 教科ごと、保管場所等などの一覧表があれば。年度当初に配付されれば転入者も把握できそう。
- ・ 各教科の年間指導計画の単元に記入してあれば使用回数も増えるだろう。

以上のような結果になった。教員対象のアンケート結果から活用のための手立てが見えてきたが、各校の実態と照らし合わせて絞り込むため事務職員にもアンケートを実施した。

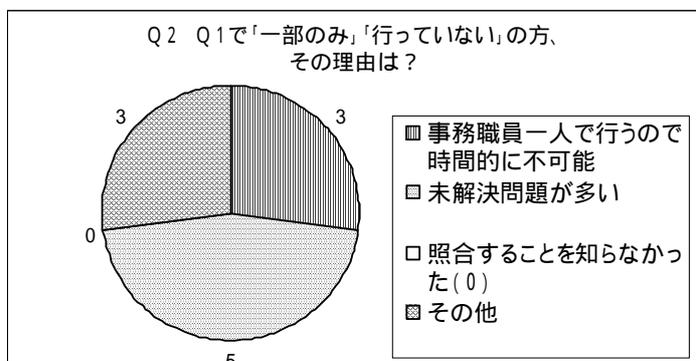
(平成17年9月下旬)

事務職員対象アンケート 回収率 96.6%

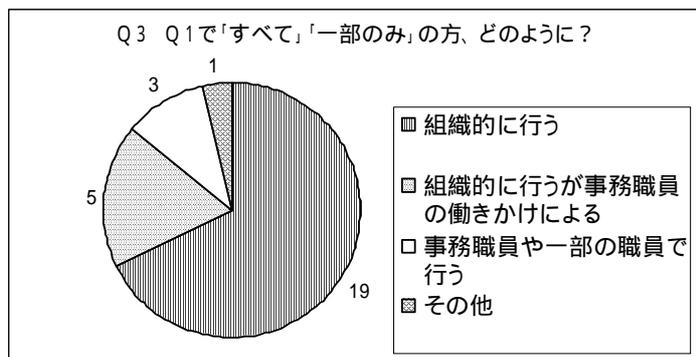
* グラフ中の数値は回答数



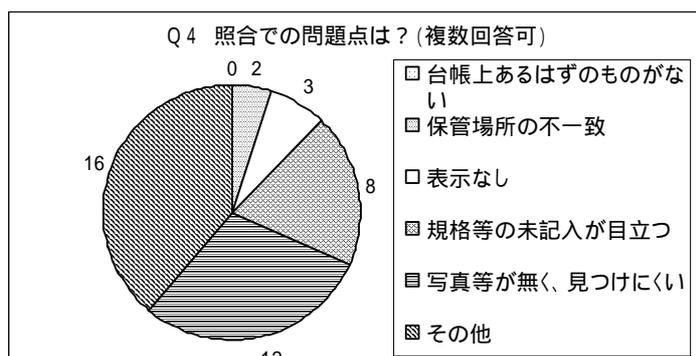
ほとんどの学校ですべての備品について照合が行われている。
 ・ 諸事情により一部のみ、行っていない。
 という意見もあった。



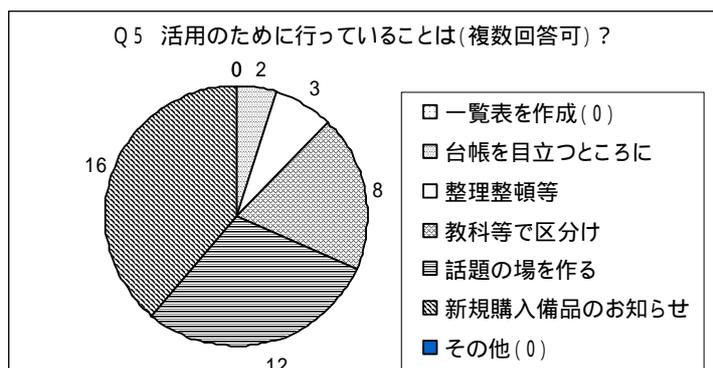
・ 備品の整理状況が悪く照合が困難だったため、全職員で保管場所等の片付けを行ったが時間がかかってしまった。
 ・ 廃棄済みの備品を保管しておくため備品台帳と現有数が合わず総数の把握が困難だった。
 など未解決問題のためすべて行えなかった。
 という意見があった。



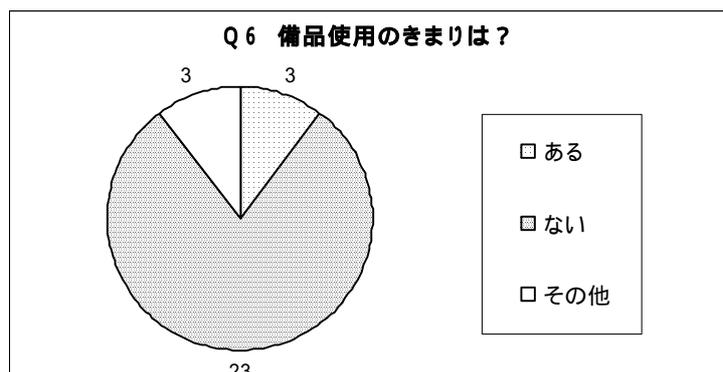
会議等で周知し校務分掌で割り振って行う所が多かった。



・ 少人数学級導入のため教室が変わってしまった。
 ・ 未廃棄が多く同じものがいくつも存在する。
 などの意見もあった。



新規購入時にお知らせ配付、雑談や会議等で話題の場を作り注意関心を喚起する意見が多かったが、備品一覧表を作成している人はいなかった。



- ・ 曖昧。全体の周知はなくそれぞれの感覚に頼っている。
 - ・ 何事も次の使用者が困らないよう心がける。
- などの意見もあった。

以上のような結果になった。教員対象、事務職員対象アンケートの結果を基に問題点の明確化と手立ての検討を行うことにした。

問題点の明確化及び手立ての検討

今回実施した教員対象アンケートの結果言えることは、大半の人が自分の担当教科についてはどんな備品があり、保管場所がどこなのかを把握しているということがある。これは毎年備品照合を行っている結果と思われる。照合を行う際に現物と数があわない、形がわからず時間がかかる、修理や廃棄の判断に迷うなど問題点のある中できちんと照合がされており、併せて整理整頓も行い授業で使えるものを確認し活用しているようだ。しかし、自分の担当教科以外については把握していない人もおり事務職員や他の教員に聞きながら探して使っている状態である。

また、異動して間もないためどんな備品があるのかわからない人もおり、それが備品活用できていない理由にも繋がっているように思える。

その他にも、保管場所の共通理解と整理整頓(備品の修理と廃棄を含む) どんな備品があるのかわかるような備品一覧表の作成などの今後の研究に取り入れたいと思われる意見をいただいた。

一方、事務職員対象アンケートの結果から照合はほとんどの学校で実施しており組織的に行っている所が多く見られたが「台帳上あるはずのものが無い」「保管場所の不一致」など問題点もそれぞれあった。

また、「未解決の問題が多い」「事務職員一人で行っている」等(事務職員アンケートQ4グラフ参照)の理由により、すべての備品を行うことができなかったという学校もあった。

備品活用を促進してもらう方法として、「新規購入備品のお知らせ配付」「話題の場を作るなどコミュニケーションを図る」「保管場所を区分けする」など実践している学校が多かった。しかし、教員からの意見にあった「備品一覧表」については作成しているところはなかった。

備品使用のきまり(ルール等)については80%の学校で「ない」という状況だった。

これらのことから活用を促すために有効と思われるものは何か検討し、以下のような点につい

て研究することにした。

- ・ 備品台帳に写真やカタログのコピーなどを貼り目的の備品を探しやすくする。
- ・ 備品保管場所を使いやすく整理整頓する。
- ・ 備品に関するルールを作成し、担当者、修繕や廃棄等の流れを明確にする。
- ・ 備品一覧表を作成しどんな備品があるのか、保管場所、数量等記入し配付する。

手立ての実践とその成果

これらの手立てを各方に割り当て、研究を進めた。ただし、割り当てられたもののみ実践するのではなくこれらを含む研究とし、教員対象アンケートの内容などを参考としてアイデアを取り入れながらそれぞれ取り組んだ。

- ・ 玉川方部...備品台帳に写真等を添付する。
- ・ 平田方部...備品保管場所の整理整頓をする。
- ・ 浅川方部...備品に関するルール作りをする。
- ・ 古殿方部...備品一覧表を作成する。

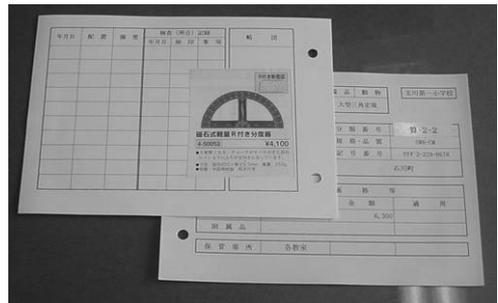
実践内容は以下のとおり

玉川方部の実践 ~ 備品台帳に写真等を添付 ~

【実践内容】

小学校は、社会科と算数科について実践し、中学校は平成16・17年度購入備品について実践した。

- 1 備品台帳に写真を貼り、品名だけでは把握しにくい備品の管理・活用・照合につなげる。
 カタログの写真を切り抜き、台帳に貼る。
 カタログに写真の無いものなどは、デジカメ等で撮影したものを台帳に貼る。
 次年度の予算編成の際に、各教科主任に写真を貼付した備品台帳を配付する。



- 2 箱等に入っている備品をわかりやすくするために、ラベル等で備品に品目名を表示する。
 テプラ等で大きめに品目名を作成し、箱等に貼付する。
 箱に入っていない物でも、表からわかりにくい物については貼付する。



- 3 資料室等の棚に備品台帳の一覧表を貼り付け、その棚に何があるのかわかりやすく表示する。

C D等で配付されている整備台帳を現年分だけ出力し、壁や棚等に貼る。

「配置図」を作成し、入口に貼付すると共に、一覧表へ配置表を付け加えた。

| 番号 | 例示品名 *は「など」の該当品名 | 現度平 有未成 数量年 | | | 月日 | 予算区分 | | |
|-------------|---------------------|-------------------|---------|------------|------|-----------|-----------|--|
| | | | | | | 教材費 数量 | その他 数量 | |
| 1. 発表・表示用教材 | | | | | | | | |
| 1 | オーバーヘッドプロジェクター | 8 | 東・西・南・北 | A・B・C・D・掛図 | | | | |
| 2 | 拡大機 | 1 | 東・西・南・北 | A・B・C・D・掛図 | 5/10 | 1 | | |

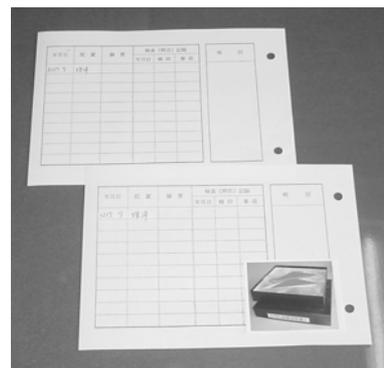
【成果と課題】

1 上記1について

備品台帳に写真を貼ったことで、品目名をただだけではわからなかったものや、見分けにくかったものの照合がしやすくなった。また、次年度の予算編成の際に、ある教科主任のほうから「備品台帳を見せて下さい」と申し出があり、台帳を基に次年度の教科備品の購入希望を作成してもらえた。

その他にも、教材研究の際に台帳を見て備品を使用する職員も見受けられた。

しかし、台帳を見やすくしても、利用方法がわからなければ使えない物になってしまうので、台帳の見方・利用方法についても職員に周知していく必要を感じた。



2 上記2について

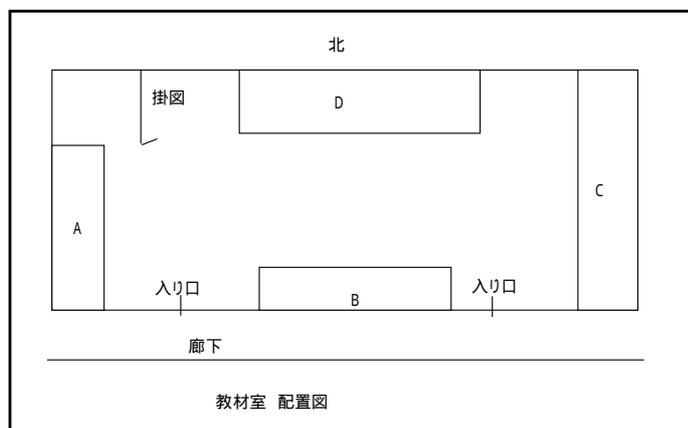
どの備品であるかがわかりやすくなり職員に聞いたところ、「利用しやすくなった」との声が多々聞かれた。また、備品管理もしやすくなった。



3 上記3について

教材室等の中では、備品の場所がだいたいわかるだけでも隅々を探すより時間短縮でき、利用しやすくなった。また台帳と連動させることにより、照合等の負担が緩和され管理しやすくなった。

しかし、教材室等の整理整頓が必要になったことにより、小学校では学年ごとの整理も考えられる。今後、それを踏まえて整備する必要があると思われる。



【今後の取り組み】

今回の取り組みは一部の備品について行ったが、限られた備品のみではなくすべての備品についても写真等の貼付をしていきたい。

また、よりよい備品一覧表（全教科）を作成し、提示していきたい。その際により多くの備品を活用してもらうために一覧表、台帳にその備品を使用する学年、単元名などを記載しておければと思う。

そして、備品台帳と照らし合わせた教育課程編成を行うことで、更に備品の有効活用ができると考えられるので今後検討したい。

平田方部の実践 ～ 備品保管場所の整理整頓 ～

【実践内容】

各学校で備品の保管場所の「整理整頓」と「表示の工夫」を行った。整理整頓については、できるだけ全職員で行うことを目標にした。

<実践例1 Y小学校>

1 実践前の状態

国語・算数・社会科は資料室、その他の教科は各特別教室に保管。

同じ種類の備品が別々の棚に置かれていたり、何が入っているかわからない箱が棚に押し込まれたりしている状態。また、持ち出したまま返却されていない備品も多数。

2 実践内容

職員打ち合わせ等のない週の同時間を利用した40分程度を使用して全職員で実施。（前々年度より実施しており、過去7回実施している）

同じ種類の備品を同じ棚に集め、棚ごとに備品名と現有数を表示したラベルをつけた。

横から見ただけではわからない備品1つ1つの側面にもラベルをつけた。

備品の適切な保管を促すためのポスターを提示した。

整理整頓後もじむだよりや職員会議で備品の使用と後片付けの協力を依頼した。

<実践例2 Y中学校>

1 実践前の状態

教科ごとに資料室・各特別教室に保管。

処分すべきものなのか、修理して使用するものなのかかわからない備品が棚のあちらこちらに押し込まれた状態。

2 実践内容

教員は放課後も部活動指導で忙しく時間がとれないため、事務職員と用務員2名で1ヶ月かけて整理した。

燃えないゴミ等は、週の回収日に出したり資源ゴミの回収業者に依頼したりと、なるべく費用をかけずに処分した。

棚に教科ごとのラベルを貼り、ビデオ等も教科ごとに分けて並べた。

【成果と課題】

<実践例 1>

ほぼ全員の協力を得ることができ、棚内がきれいに整頓され、ゴミや廃棄備品などの整頓も行うことができた。作業の過程で、「こんな備品があったんだ!」という声も聞かれ、奥にしまいこまれていたため今まで目につかなかった備品や、未使用のまま埃に埋もれていた備品の発掘につながった。教員への備品の存在をアピールするよい機会になった。

その反面、事務職員からの呼びかけで実施したため、教室の担当教員が「これはどこに置きますか?」「捨てますか?」と事務職員に質問するといった備品や担当教室の管理に対する意識の低さが見られた。また、棚数が不足しているため備品が積み重なってしまい、取り出しにくいという課題が残った。その他にも、粗大ゴミ廃棄の予算をとっていなかったため廃棄の際に苦労した。(大きなものを分解して不燃ゴミや資源ゴミの日にだすなど)

清掃前



棚に備品名を表示。



清掃後



側面から見ただけではわからない備品には備品名を表示。



ポスターも作ってみました。



<実践例 2>

教室は見違えるほどきれいになり、教員や生徒もその変容に驚いたようである。

しかし、学校の実態から教員の協力を得ることが難しく、今回は事務職員と用務員の2名で行ったため、自己満足に終わったような気がする。教員が意識的に備品を活用するためには、教員自ら整理整頓に関わってもらうことが必要ではないか。どのようにその時間を確保していくかが課題である。

清掃前



清掃中



大量のゴミは、ゴミの収集日に計画的に捨てました。

清掃後



ビデオテープの棚も見やすく、取り出しやすく整理しました。

今回の取り組みにより小学校と中学校、または各学校の実態によって整理の仕方や取り組み方が異なるということがわかった。小学校においては比較的全職員での作業が可能であるが、中学校においては放課後も部活動等があるため教員への協力依頼はかなり難しい。また、保管場所が一箇所の学校、数箇所に配置されている学校、教科や学年ごとに整理を行っている学校もあり、同じ足並みで研究を進めることが困難であった。

そのため当初は全職員で行うことを目標に取り組んだ整理整頓も、結局はその学校の実態に応じた方法で、いかに効率よく実施できるかということで進めることにした。

各校とも共通の感想として、全職員で備品の整理整頓を実施することは大変有効であるということがあげられる。一部の職員のみで行った学校においては、整頓後も場所がわからず混乱したという声や自己満足で終わってしまったのではないかと声がかかれたが、全職員で実践した学校からは教員の備品の整理整頓に対する意識が高まり、実物を目にすることにより「今度使ってみよう！」という気持ちを起こさせる啓発になったという声がかかれた。しかし、全職員で取り組むことは容易ではない。いかにして全職員の協力を得ていくかが課題である。

また、整理整頓を進める上でのもう一つの課題として、粗大ゴミの廃棄予算の問題が残る。今回、予算を確保していなかった所が多く、一般不燃ゴミとして計画的に廃棄したため大変な時間と労力を要したという結果がでている。

一般不燃ゴミとして計画的に廃棄することも一つの手段ではあるが、こうした取り組みを行っていく上での必要経費として町村単位で予算化していく手段を講じることも大切ではないかと考える。

【今後の取り組み】

整理整頓された状態を継続していくことが重要と考える。取り出しやすさと見つけやすさに重点を置き表示の工夫も行ったが、備品活用と同様に大切なことは後片付けである。この点について、打ち合わせやじむだより等を利用し呼びかけなど行い、さらなる徹底を図っていきたい。

浅川方部の実践 ～ 備品に関するルール作りと周知～

【実践内容】

校内における備品管理に関するしくみや教職員の役割分担などを明示した基本モデルとなる「備品管理に関するきまり」を作成し、各校の実態に応じた形で教育計画に掲載した。

【成果と課題】

「備品管理に関するきまり」を通して備品管理体制の確立と各校の教育計画等に掲載し周知を図り、そこから備品活用につなげていくことを目標として取り組んできた。

年度当初に教育計画等に掲載された内容を職員会議等で周知したが、今後さらにこの内容に沿った備品管理と活用が図られることを期待したい。

また、用語等表現が難しいものがあるので、できるだけ掲載するものは簡単な言葉に替えたが、仕組みや用語などについては事務職員が理解しておく必要があるため、地区事務研で関連する地方自治法等についての研修を企画し、この機会に全会員で共通理解を図るべきと思われる。

【今後の取り組み】

今後、さらに備品活用を図るために各校の備品管理体制を見直し、「備品管理に関するきまり」をよりよいものに改編していく必要があると考える。また研修会を開催し、関係法令について理解する必要がある。

古殿方部の実践 ～ 備品一覧表の作成～

【実践内容】

各校ごとに理振以外の教材備品について一覧表の作成（中学校については共通備品）と配付をし、備品の活用促進を図った。この一覧表により転入者を含む全職員が、現在保有する備品はどのようなものがあるのか、また保管場所はどこなのかを把握することができるものを作成することにした。

形式については教材備品台帳の分類名で作成し、摘要欄やサイズについては各校に任せることとし、転入者もすぐに把握できるよう4月1日現在で職員へ配付できるよう整理する。これにより備品の有効活用につながったかなど意見を聞き、手立てが有効であったかを確認した。

【成果と課題】

一覧表にすることにより他教科の備品を知ることができ、未活用であった備品を再度確認することができた。授業で備品を使用する際、配置場所が示されているためそれまでは誰かに聞くだけだったが、すぐに探すことができるようになったなどよい効果が見られたものがあった。今回配付したことにより、ある学校では校長先生が率先して備品の整理整頓を行い、全職員で片付けを行い、その際に眠っていた備品の存在が判明し学校としての備品整理の大きなきっかけになるところもあった。

また、配付した一覧表は予算編成の際に活用することもできた。教育課程の中に綴じ込み活用したいという意見もでた学校もあった。

しかし、利用しやすいように「主な使用学年」「使用単元・教科」などがあるとよいという意見や、保管場所ごとのリストがあるとよいという意見もあった。その他にも現有数の不一致、品名だけでは形がわからないなどの問題点があり改善を必要とするものがあった。

【今後の取り組み】

一覧表の形式は各校に任せたが、一部検討が必要と思われる。照合を定期的に行うことにより、保管場所の確認や廃棄手続き、現有数確認を確実に行う必要がある。

また、保管場所ごとにリストを作成し、その保管場所ごとに掲示することも必要と考える。備品の入れ替え等があればその都度記入するようにし、常に新しいデータにしておくことが大切と考える。

5 今後の課題

今回の研究は「子どもの学びの支援」を目標とし、その手段の一つとして備品活用を選択し取り組んできた。実践を通してわれわれ事務職員や教員が備品管理の大切さや必要性等を再確認し、さらに関心を持つきっかけとなった。また、本来当たり前になっていなければならないものを当たり前前の状態で維持する難しさを実感させられた研究であった。

石川地区では研究の内容として、各方部に考えられる手立てを割り当て、地区として備品の有効活用をめざし取り組んできたが、それぞれの学校において抱える問題、備品使用や管理に関する状況は様々であり、取り組みにくいものもあった。また、手立て一つだけでは効果は弱いが複数の手立てを実践できればもっとよい効果が得られ、活用しやすい環境を作ることができるのではないかという可能性を感じた。

今後この研究を継続し、各校においてより効果的に子どもの学びを支援していくためには、今回の研究を活かしながらそれぞれの学校の実態にあったものを考える必要があると思われる。また、石川地区小中学校事務研究会としては環境整備面のみでなく、各校の教育課程や予算編成等に繋がっていけるように研修や研究を重ね、さらに深めていくことが必要である。

6 おわりに

今回の取り組みは研究が途中ということもあり、まだまだ問題点や改善点が多々見られる。そのため確かな成果を実感するためにはもう少し時間がかかると思われるが、今後も「子どもの学びの支援」という目標に向かって研究を継続し、発展させより良い教育環境へと改善していきたい。